
無口猫の恋

斎藤章

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無口猫の恋

【Zマーク】

Z2358M

【作者名】

斎藤章

【あらすじ】

巧×希の恋愛ストーリー

口語（漫談）

「え、いや、藤原さんです。え、いや、読んだトモ。

。。。。。。。。。。。。

目覚まし時計の音が鳴り響く。

外はまだ暗く、殆どの人は布団の中で寝ている時間。

俺は目覚まし時計を止めて起き上がつた。

今日も1日が始まるな…。

そんなことを考えつつ着替えを済ませて厨房に向かう。巧が厨房に入ると既に希がケーキを作り始めていた。

「…巧、おはよう

「おはよ、希」

巧は希にあいさつを返した。

「乙女姉さんは？」

巧は辺りを見回すがストレイキヤツツのオーナー兼パーティシェールの乙女が見当たらない。

「…まだ寝てる」

希は少し申し訳なさそうにこっちを見た。

ストレイキヤツツは洋菓子店である。

だからこゝして朝早くから売り物のケーキを作っているわけだが、オーナーの乙女姉さんがまだ寝ている。

俺は「はあ…」と溜め息をついて乙女姉さんを起こしに行つた。が…乙女姉さんは寝ボケて起きようとはしなかつた。

結局希と俺の二人で作業をした。

これが一度や一度ではなくほぼ日常化しているのが悲しい。

最近ではほぼ希がストレイキヤツツのメインパーティシェールとしてケーキを作つている。

しかも希が作つた方が姉さんのより美味しい…。

その後一人で今日の売り物となるケーキを作り終え、朝食を食べた。学校へ行く支度をしているとようやく乙女姉さんが起きてきた。

「おっはよー！巧、希ちゃん」

朝からハイテンションのあいさつをする。

もう今朝の寝坊のことを怒る気も失せるくらい。

「乙女姉さん、もう俺たちは学校に行くから店のことは頼んだよ」

「まつかせなさい」

そう言って自信あり気に親指を立てる。

これでも乙女姉さんに限っては全然安心できないのだが時間がない。

「じゃあ行つてくるよ」

「にゃあ。行つてきます」

「行つてらつしゃーい」

乙女姉さんに見送られ、学校へと向かった。
学校へと行く途中にある芹沢教会に寄った。
教会の前に着くとほぼ同時に文乃が出てきた。

「おはよう、文乃」

「なんでアンタがここにいるのよー？」

何故か怒り気味の文乃。

「どうせ学校への途中にあるんだからいいだろ？」

「勝手にすれば。別に私はアンタと学校に行きたい訳じゃないし」

それだけ言って歩き始める。

この様子を見たらなんて仲の悪い幼なじみなんだろうって思つだらう。でもそれは違う。

文乃は素直に自分の言いたいことが言えない性格なのだ。
つまりさつときは『巧と学校に行きたい』って言つてゐる。
普通の人にはわからないだらうけどこつちは長いつきあいだから文乃の言つてることが本当かそうでないかはすぐにわかる。
「で、お店の方はどうなつてるの？」

文乃は相変わらずムツとした感じで聞いてきた。

「今朝の仕込みは乙女姉さんが起きなかつたから希と一緒にやつた。
ケーキは全部希が作つたけど」

「にゃあ

少し誇らしげな表情を希は見せた。

「また乙女さん抜きで仕込みをしたのー? まったく、乙女さんにはしっかりしてもらわないと」

文乃はストレイキャッツのバイトとして希が来る前から働いている。クリスマスやバレンタインなどの忙しい時期になると朝の仕込みまで手伝いに来てくれる。

俺やストレイキャッツのことを心配してくれる頼れる幼なじみなのだ。

学校に近づくにつれ生徒の数が増えてくる。

一人で登校する者、友達と話しながら登校するものなどいろいろだが、どこにある普通の登校風景だ。

「ういっす! 巧

後ろを振り返ると家康と大吾郎が歩いてきた。

「おう! おはよう、大吾郎

「つむ

「俺に対してはあいさつなしか! ?」

家康の声が響き渡る。

「せっかくこの前話したアニメのDVD BOX持ってきてやつたのに貸してやんねえからな」

そう言って俺にDVD BOXを見せつける。

「すみませんでした家康さん。数々のご無礼をお許しください

俺は深々と頭を下げた。

「始めからそうしていればよいのだよ」

ほれっと言いながら家康はDVD BOXを貸してくれた。

コイツは重度のオタクだ。

確かにコイツの影響で俺もちょっとオタク気味だがコイツ程ではない。

「おはよー! びじこます、巧先輩…ってああーーそのDVDはーー!」

突然大声をあげたと思うと十和野は俺からDVDをひつたくつた。

「やつぱり。これは初回限定版(声優&原作者へのインタビューの

特典映像付き）じゃないですか！」「

目を輝かせながらDVDを見つめる。

「ふつ、気づいたか十和野…そつせ、それは俺が週末を全て潰して並んで手に入れた品なのだ」「

私にも観せてください！」と、家康にねだる十和野。

十和野はつい最近『迷い猫同好会』に入った新入生だ。最初はいろいろあつたが今では立派な俺達の仲間だ。

そういうしているうちに俺達は学校へと着いた。

『梅ノ森学園』…これが俺達の通う学校の名前だ。

お金持ちの理事長が趣味的な感じで運営しているため授業料が一切いらない。俺や文乃にとつてはありがたいことである。

立派な校門の前にはこれまた高級感バリバリの黒いリムジンが停まっていた。

「遅いわよあんた達！」

リムジンのドアが開き、中から千世が現れた。

千世は理事長の孫娘で超がつくほどのお金持ちだ。

『迷い猫同好会』の会長を務めている。

「うつさいわね。教室で待つてればいいじゃない」

「なつ、この私に口答えする気！」

「にゃあ、仲良く」

いがみ合つ文乃と千世、それを止める希…いつもと変わらない様子だ。

「巧先輩、これ観終わったら私に貸してください！」

家康とオタクトークに華を咲かせてた十和野が俺の体を押した。

突然だつたため俺は持ち直すことが出来ず転げてしまった。

「なつ！」

転けた場所がたまたま文乃の近くだつたためもろにパンツが見えてしまった。

（ちなみに縞パン）

文乃からは沸々と怒りのオーラが込み上げてくる。

「 ちょ、ちょっと待て文乃。今のは不可抗力であつて……
必死に弁明しようとする。が……」

「一回死ねー！」

お決まりのセリフを言いながら文乃は俺を蹴り飛ばす。
これも俺達の日常ではいつものこと……。

口語（後書き）

えりでしたか？また、読んで下せー。

伝えたい想い（前書き）

いつも、斎藤章です。呼んで下さい。

伝えたい想い

昼休み

文乃・千世・希の三名は学校の屋上にある『迷い猫同好会』の部室に集まっていた。

「何で今回集まつてもらつたかあんた達わかつてるでしょうね？」
いつになく真剣な表情で千世は言つた。

「巧のことでしょう？」

「そうよ…」

文乃に向けて『その通り』と並びように指を指す。

「しかも…事態はかなり深刻よ」

千世の言葉に他の二人も頷いた。

先日のティーパーティーの件で十和野が『迷い猫同好会』の仲間になつたことは良かつた。

元々そのために企画した訳だから千世・文乃・希も大成功だと思っている。

が…しかし、その後巧と十和野の仲が急に良くなつたことに問題があるのだ。

お互い趣味も合うため、いつも会話が盛り上がる。

いつ十和野が巧のことを好きになつてもおかしくぐらいだ。

これは三人にとつては非常にマズいことである。

十和野が巧のことを好きになるといつことはライバルが増えるということになるからだ。

「とにかく！これ以上ライバルが増えないよ！」にしなければならぬい訳よ

バンと机を叩いて立ち上がる千世。

「確かにそうだけど…いったいどうするの？」

「それがわからないから集まつてるんじゃない。何か良い案はないの？」

その後、しばし沈黙が訪れる。

「誰一人ないの？」

「……にやあ、ない」

「私も……」

三人は一斉にため息をついた。

「役に立たないわねえアンタ達」

「べ、別に私は巧のことなんか好きでもなんでもないから関係ないし」

「文乃、嘘

「う、つ……」

希の言葉に千世も頷く。

希と千世もこの一年間で文乃の言つてることが本当かそうでないかがわかるようになつた。

「もつと素直になりなさいよねえ」

「あ、あんたに言われたくないわよ」

「にやにお～」

朝と同じようにケンカを始める一人。

「ケンカしても何も変わらない」

二人の間に入つて仲裁をする。

二人も希の言う通りだと思つたのか今回は素直にケンカを止めた。

「とにかく！モタモタしてたらいつまたライバルが増えるかわからぬいからガンガンアタックするわよ。以上！」

「ちょっと待つて。それ、この前も似たようなこと言つてなかつた

？」

「……にやあ。一緒に

結局前回とほとんど変わらない内容でこの場を終えることになつた。午後の授業も終え、放課後となつた。

普段なら文乃と千世もバイトとして『ストレイキヤツツ』の仕事があるのだが、今日は一人共用事があるとかで俺と希だけであることとなつた。

まあ乙女姉さんもいるから大丈夫だろ？… そんなことを思つて帰宅するとやけに店内が静かである。

まさかと思い店内を探すと置き手紙を見つけた。

「しまつた～…」

俺はその場にしゃがみ込んだ。

乙女姉さんの残した手紙には『チリで大規模な森林伐採が行われるので木を植えてきます。チリも積もれば山となる～ 乙女』と書かれていた。

またいつもあれかと思うと気が遠くなつた。

そんな巧の気持ちを察してか希は巧の頭を撫でる。

「乙女姉さんが帰つてくるまで頑張ろうな」

「……にやあ」

希はコクンと頷いた。

その日の夜、希はリビングのソファーに座つて猫たちに囲まれながらテレビを見ていた。

これは希の毎日の日課みたいなものだ。

寄り添つてくる猫たちを撫でてやることで心が落ち着く。

が、今日はずっとと考え事をしていた。

乙女の不在で一つ屋根の下で一人つきり今まで何度も望んだシチュエーションだ。

普段は文乃や千世がいるためいつも途中で邪魔が入つていた。しかし一人つきりとなれば邪魔者は誰もいない。つまりチャンスである。

でもいざ一人つきりになると何もできないのである。

その原因は文乃と千世の存在だった。

鈍い巧に自分の気持ちをわかつてもらうには告白しかない。だがもし自分と巧が付き合い始めたら文乃と千世はどうするのだろう。

文乃と千世はライバルであると同時に大切な仲間もある。文乃と千世とも仲良しのままでいたいという気持ちもある。

それでいつも行動に移せないでいた。

「はあ……」

希は深いため息をついた。

すると突然携帯の着信音が鳴った。

ディスプレイには『村雨さん』と表示されている。

彼女は希が前にいた施設の施設長である。

前に施設を逃げ出した希を連れ戻そうとしたこともあったが、今まで希が『ストレイキヤツ』で暮らすことを見めてくれている。

「…もしもし」

希は携帯を手に取り電話に出た。『もしもし、希？進学おめでとう』

『…どうやら進学祝いの電話をかけてきたみたいだ。』

『…いやあ、ありがとう』

『…せっかくの暮らしは変わりはない？』

『…ない。毎日楽しくやつて』

『…そう…なら良かったわ』

声で村雨が安心しているのが希にもわかつた。

『…何か話したいことがある？』

『…ある』

希はさつきまで悩んでいたことを相談することにした。

『…猫が…』

『…猫？』

『…そう。それで餌が一皿だけある』

受話器から希の相槌の声が聞こえる。

『…みんな餌を食べたい。でも食べられるのは一皿だけ…私はビリす
ればいい？』

いつかに巧にした質問と同じものを村雨にしました。

『…やうね…あなたはどうしてもそれが食べたいのよね？』

『…………まあ、食べたい』

『「だつたらあなたはそれが食べれるよつに最善の努力をしなせ。』

あなたが諦める必要はないわ』

「にやあ、わかった」

村雨の言葉に希も決心がついた。

『それにもあの巧つて男がそんなに良いの?』

予想もつかない村雨の発言に希は驚いた。

「た、巧のことじやない」

いつも冷静な希が珍しく取り乱しているのが村雨にはわかつた。

『氣づいてないと思つた? それに私にまで隠し事する氣?』

「……にやあ、『めんなさい』」

『別に怒つてないわよ。それで、そんなに巧つて男が好きなの?』

「……にやあ、好き!」

『せう…なら私は何も言わないわ』

村雨は改めて希が施設を出て巧たちと会つたことは希にとってプラスになつたと感じた。

『頑張りなさいよ。あなたならできるわ』

「わかった。ありがとう」

また連絡するわと言つて村雨は電話を切つた。

「希いー。風呂沸いたから先に入れよ」

電話を切つたとほぼ同時に巧がリビングに入つてきた。

「巧、話がある」

希はそう言つて話を切り出した。

「何?」

希は一度目を閉じ深呼吸をした。

村雨のおかげで自信がついた。

今日、はつきりと巧に自分の気持ちを伝えよ。

そう心に決めて目を開けた。「私は巧が好き」

簡潔にはつきりと巧に自分の気持ちを伝え希は顔を赤くした。

「えつ!..」

まさかそんな話だと思つてなかつた巧は慌ててこる。

「私のこと、『家族』って言つてくれていつも優しい巧が好き」

「希…」

普段無口で無表情の希が珍しくたくさん話した。

だからこそ希がどれだけ本気なのか巧にはわかつた。

「…俺なんかでいいのかな?」

「こやあ、いい

自信なさげに聞いてくる巧に希は頷いた。

「そつ…じゃあこれからよろしく

「へじこまへ

巧は照れくさそうに言った。

「…にやあ、よろしく

希の表情がパターと明るくなつた。

その日の希は巧に自分の気持ちが伝わったことへの充実感でいっぱいだった。

次の日

昨日とほぼ変わらない朝を過ごした。

変わつてることと言えばこの女姉さんがいないことと希がずっと嬉しそうにしていることぐらいだ。

まあ俺としても彼女いない歴=年齢の歴史にピリオドが打てたことは正直嬉しかつた。

その日、俺と希はストレイキヤツツの良心市システムを発動させて学校へ行つた。

昼休み

文乃と千世は並んで歩いていた。

「なんでついて来るのよ…?」

「それはこっちのセリフよ。あんたこそついてこないでよ

何故かいつも顔を合わせるとケンカに発展する一人。でもお互い本当に嫌つてているわけでもない。

『ケンカするほど仲が良い』と言つたところだ。

「私は希に呼ばれて部室に行くだけだから

「私も希に『話がある』って言われただけだから

「……ねえ、希から私達に話があるって珍しくない?」

「そうよね……いつたい何の話だる…」

思い当たる節もなく一人は部室へと向かつた。文乃と千世が部室に入ると既に中に希がいた。

「希、私達に話つて何?」

「大事な話」

「大事な話つて巧のこと?」

「……そう」

希は首を縦に動かした。

「昨日、巧に告白した」

「ふうん…告白ね…って告白…ちよつと、希、それ本当?」

「……にやあ、本当」

「そ、そ、それで巧はなんて?」

「OKしてくれた」

希が巧に告白して、巧がそれをOKした……一人にとつては衝撃的な話だった。

昨日までしていた恋に突然終わりがきてしまった。

その後数分間、二人は無言のまま立ち尽くした。「……めんなさい」

沈黙を破つたのは希だった。

「何で希が謝るのよ」

「私が巧に告白したせいだから…」

「抜け駆け上等つて前から言つてたでしょ。私達がのんびりしてたのがいけないんであつて希が謝る必要はないって」

「そうそう。それに私は巧のことは好きでもなんでもないから気にしてないし…」

二人共、口ではこう言つてはいるがやはり表情が暗い。

文乃に至つては自分の気持ちと正反対のことを言つてはいる。

無理をしているのが希にはすぐにわかつた。

「この勝負、希の勝ちね。おめでとう」

「ちょっと、あんた。そんなに簡単に諦めるわけ!？」

「今さら何ができるの？私達も今から告白する？したって無理ですよ。もう私達にできるのは希を応援してあげるくらいしかないでしょ…」

千世は涙を流しながら訴えかけた。

千世だつて文乃の言つように簡単に諦められるわけがない。
しかし、こうなつてしまつた以上なかつた。

「…そうね…確かにあんたの言つ通りだわ」

そう言つと文乃は希の方を向いた。

「私達の想いは巧には伝えられなかつた。でも希は違う。だから私達は希を応援するわ」

「そうよ。何かあつたらいつでも相談しなさいよ」

千世も文乃も穏やかな表情を見させてくれた。

「ありがとう。二人共」

文乃と千世の巧への想いは希もよく知つていて
だからこそ一人がどれだけ辛いか希にもわかる。
でも一人はそんな状態でも自分を応援してくれると言つてくれた。
希はこの一人の分も頑張ろうと心に誓つた。

その日の放課後

「迷い猫同好会」のメンバーはストレイキャッツに集まつていた。
これによりようやく良心市システムが解除される。

「本当に誰もいないのに店を開けてたんですね…」

まだストレイキャッツで働き始めて日の浅い十和野にとつては驚きの光景である。

「乙女姉さんがいな時は毎日これなんだよ…希がくる前なんかケイキすら並んでなかつたんだ」

正直、常識的に有り得ないことが一般化している自分達が恐ろしい。
乙女姉さんの日頃の行いが良いのかそれともただの偶然か、まだ一度も泥棒に入られてないことと一応お客様がちゃんと代金を払つてくれていることは不幸中の幸いだった。「乙女さんにはもっとオナーナーとしての自覚を持つてもらいたいものよね」

まったくである。でも本人にキツく言つてもすぐいなくなつてしまふので今では全員が諦めていた。

「巧、お砂糖切れてる」

厨房で作業をしていた希が顔を出した。

「マジで？まだあつたと思つてたんだけどな…買つてこないと」

「私は今月の売り上げの計算があるからバス」

「私はお客様が来た時のために残つてないといけないし、十和野さんにもいろいろ店のことを教えなきゃいけないから…巧と希で行つてきたら？」

「えつ、俺と希で…？ベ、別に一人で行かなくてもいいんじゃないかな？」

昨日のことと下手に意識してしまい慌てる巧。

「いいから行つてくる…！」

何故か俺と希の二人で行くことにこだわる文乃と千世、結局俺は一人に追い出される感じで希と買い出しに出掛けた。

「よし。これだけあれば当分砂糖の在庫切れの心配はしなくていいだろ」

業務用スーパーでストックを含めて多めに買い、店を出る。

「じゃあ店に帰るか」

「いやあ

一人は店に向かつて歩き出す。

「あつ…」

急に何かを思い出したかのように希は立ち止まつた。

「どうした？他に何か買わないといけないものでもあつた？」

「…ない」

希はそう応えてサッと俺の前に手を出した。

ちょうどその時仲の良さそうなカップルが手を繋いで俺達の横を通り過ぎていった。

「もしかしてアレをやれと？」

「にゃあ。大吾郎もやつてた」

今年のバレンタイン、大吾郎と『迷い猫同好会』のOGである珠緒先輩が付き合い始めたその日、放課後に手を繋いで一人仲良く下校したことは今も有名な話である。

それからも一人は異常にくらいのラブラブっぷりだ。
「どうしてもやらないとダメかな？」

「……にやあ。だめ」

じいーと俺の目を上目遣いに見つめる希。
(そんなに俺を見ないでくれ。)

巧は、内心そう思っていた。

「……わかったよ」

遂に観念して希の手を握った。
希は満足げに歩き出す。
周りの視線が気になる…。
俺は恥ずかしい気持ちを抑え、店へと帰った。

伝えたい想い（後書き）

どうでしたか？感想を頂けると幸いです。

臨済学校（繪書卷）

「いづれ、 極藤章です。今回もいづれ読んで下され。

それから約2ヶ月が経つた。

鬱陶しい梅雨が明け、初夏の季節になる。

ちなみにまだ乙女姉さんは帰ってきてない。

今ごろチリで毎日植林をしているのだろう。

乙女姉さん…そろそろ帰つてきてくれ…これが今の俺の願いだ。

こっちの方は相変わらずだ。

今日も『迷い猫同好会』のメンバーはストレイキャッツに集まり作業をしている。

「ねえ…こうなんかグッとテンションの上がるイベントとかないの？」

お客様用のテーブルに座っていた叶絵が言った。

叶絵は文乃の親友で俺達のクラス委員長だ。

『迷い猫同好会』に入ったのはほとんど十和野達と変わらない時期で今では同好会のムードメーカーだ。

「どうしたんだよ急に？」

「だつてさー、こう毎日毎日ケーキを売るばかり…いい加減飽きてくるんだよね」私的にも読者的にも

読者つて誰だよつとツツコミたくなつたがあえてツツコまなかつた。

「だからさーこうひらでこう楽しめるイベントが欲しいわけよ」

本当個人的な希望である。

「あるわよ」

作業をしていた千世が話に入ってきた。

「えっ！あるの？何、何教えてちーぽん」

「俺も知りたい。千世、何があるんだ？」

正直この時期にそんなイベントは身に覚えがない。

「臨海学校」

「臨海学校？そんなの去年はなかつただる」

「そりやそつよ。今年からなんだから」

「これまた何で…」

「で…何で急に今年から臨海学校なんてあるのよ?」

話を聞きつけ他のみんなも集まってきた。

「そこの無駄にテンションの高いのが言つたように私も同じことを感じてたのよね。そこでお爺様に相談したらこの臨海学校が新たに梅ノ森学園の行事に加わったわけよ」

……なんというか…流石梅ノ森家と言つた感じだ。

たつたそれだけの理由で新たな学校行事を作るとは……恐るべし梅ノ森財閥。

みんなは呆れ顔をしている。ただ一人を除いて…

「いやつほー!さつすがちーぽん、わかってるねえ。で、いつなのは?どこでやんの?」

ハイテンションモードに突入した叶絵が質問の嵐を浴びせる。

「日時は来週。場所は梅ノ森家が所有するプライベートビーチと超高級ホテル。費用は全て梅ノ森家が負担するわ!」

千世は誇らしげに言い放つた。そんなこんなで決まった臨海学校当田。

移動中のバスの中で各自みな友達との雑談を楽しんでいた。

一年生の十和野と服部以外はみな同じクラスの『迷い猫同好会』メンバー。

そのためみんなでかたまって座っていた。

「ついにきたよ臨海学校!」の口をどれだけ待ち焦がれてきたか…

そう言つて泣くマネをする。

まだホテルにも着いてないのに既にテンションの高い叶絵。

「委員長…その元気ホテルに着くまでとつておけよ。なんて言つか、こつちがついていけない」

他のみんなもううんうんと頷く。

正直鳴子のテンションはみんな鬱陶しいと感じているようだ。

「どうしたどうした巧っち?これから行く所は海ですぜ海!」

「そりや臨海学校だからな」

海のない臨海学校なんて聞いたこともない。

「海と言えば海水浴。海水浴と言えば…そう、水着…」

最後のところ溜めて言つよくな」とか?とこつシツコリはあえてしないであげた。

「巧つちの愛しの希つちの水着姿をじつくり堪能出来ますぜ」

そう言ってこちらに向かつて親指をたててきた。

「で、実際のところどうなのよ巧つち?希つちの水着姿楽しみなかい?」

「べ、べつにどっちだつていいだり」

俺は鳴子からの質問の答えを放棄した。
そりや俺だって健全な男子高校生だ…どちらかと言ふば楽しみの方だ。

でもここには希もいるんだ。

こんなこと口が裂けても言えるわけがない。

チラリと希の方を見た。

すると希と田が合つた。

変に意識して顔が赤くなっているのが自分でもわかった。

「…巧、楽しみ?」

「えつ、な、何が!?」

「臨海学校」

『水着』って言われたらどうよつかと一瞬焦つた。

「もちろん楽しみだよ。希は?」

「私も巧と一緒に」

「そつ…じゃあいい思い出になるといいな」

「……にゃあ」

希は頷きつつすら微笑みを見せた。

こつして俺達の一泊二日の臨海学校が始まった。

臨海学校一日目

一日目はほとんど移動だけで終わってしまった。

俺達がホテルに着いた時にはもう辺りは真っ暗だった。つまり実質今日からが臨海学校と言つてもいい。

朝食後は昼まで自由に楽しめということで、『迷い猫同好会』の男どもは文乃達の準備ができるのを待っていた。

「それにしてもほんとすごいホテルですね」

まつたくだ。めちゃくちゃ広くて超豪華。

さすがに一人一部屋とはいかず三・四人で一部屋だけそれでも十分過ぎる広さだ。

金持ちはすごい…改めて思い知らされた。

「男子ども～お待たせ～！」

しばらく雑談していると叶絵を先頭に文乃・千世・希・十和野がやつてきた。

「えらい時間が掛かつたな」

「まあまあ。女の子はいろいろ準備が大変なわけですよ。それよりもみんなの水着姿はどうですか？」

委員長はスポーツ用の水着…活発な委員長らしいと言えばそうだろう。

千世・文乃・希はそれぞれ去年の水着コンテストで着た水着。

千世は希と文乃のプロポーションを羨ましそうに見て、文乃は無愛想な表情、希は相変わらず無表情だ。

十和野は恥ずかしそうに他の四人に隠れる形でいる。

「フツ、三次元の女の子の水着姿なんて俺には興味な……」

「黙れ菊池！アンタに聞いてない」

キツい野次に一步後退する家康。

「…巧、どう？」

入れ替わりに希が前にでる。

「うん、すごい似合つてるよ」

そのひとことで希の表情がパアッと明るくなつた。

一方、文乃・千世の二人は寂しそうな表情でそれを見ていた。

もし自分が希の立場だつたらどんな良いだろうか…一人共まだ完全

にふりきれない様子だった。

「まあ時間も限られていることですし、今日は思う存分楽しもう!」

そんな一人の気持ちを察してか叶絵が話を切り出す。

「うむ。珠緒さんがいなのが心残りだが珠緒さんの分まで頑張つて楽しまなければ」

楽しむのに頑張るもなにもな…いや、もう何を言つても無駄か…。

大吾郎はすでに海に向かつてダッシュしていく。

とにかく、大吾郎が先陣を切り、俺達は海で遊び始めた。あつとう間に時間が過ぎ昼食の時間になる。

昼食はビーチでバーべキュー…みんなワイワイ雑談しながら食べている。

「あっ、菊池! それ私が焼いてた肉よ!」

文乃が大声をあげる。どうやら家康が文乃の肉を食べたようだ。

「フッ、この世界は弱肉強食! それにそんなに肉に執着心を持つてそんなんじやあ太っちゃいますよ~」

「う、うつさい。一回死ねー!!」

文乃の蹴りが炸裂し家康は遙か後方に吹き飛ぶ。

弱者(家康)が強者(文乃)に喰われたな……家康、今のはお前が悪い。

まあここが砂浜で良かつたな。

俺は家康を哀れみの眼差しで見た。

砂浜に頭から突つ込みのびている家康を横目に俺は肉を取ろうとすると…

「巧…」

声をかけられたと思うと希が自分の肉を俺の口元まで持つてくる。これはもしかして……。

「…あーん」

やつぱりかい!

「ちゃんとフーフーしたから大丈夫…」

いや『大丈夫』じゃないって。

みんなもいるから…ホラ、委員長なんかめちゃくちゃ田を輝かせて
こっち見てるし…。

「……」

希は無言でちらりと肉を近づける。

そして数十秒が経過した。

仕方がない…どうしても俺が食べないと気がすまないみたいだし

…。

俺はどうとうあきらめて希の肉を食べた。

肉が口に入った瞬間、周りからオオツと歓声が上がる。

「いや～見せつけてくれますな～お一人さん。夫婦みたいですね」
やめてくれ。

こっちは恥ずかしいんだから。

「巧、最初は恥ずかしいだろうがその内それも気にならなくなるか
ら安心しろ」

俺に対するアドバイスのつもりなんだつが…大吾郎。
お前と珠緒さんの場合あれは異常だから。
普通あんな人前でやらないよ…。

そう思いながら俺は肉を飲み込んだ。

「…美味しい？」

「うん、美味かつたよ」

「よかったです。じゃあ次…」

そう言ってまた肉を近づける。
えつ…まだやんの…。

その後俺は腹いっぱいになるまで希に肉を食わされ続けた。食事を
終え少し休憩をとる。

さすがにみんな食後にすぐ遊ぶなんてできないようだ。

「それじゃあこの時間を使って作戦会議を開くわよ」

千世は立ち上がりメイドの鈴木と佐藤にホワイトボードを用意させれる。

「ちょっと待って。なんのための作戦会議よ?」

「えつ、そんなのビーチバレー大会のために決まってるじゃない」

当たり前のように答える千世に『ビーチバレー大会！？』と千世以外のメンバーがユニークしてツッコむ。

「言つてなかつたつけ？ほら、ただ遊ぶだけじゃあ面白くないでしょ。だからお爺様が企画したの。ちなみに優勝賞品は米俵一俵よ！」

初耳だよそんな話。

ていうか高校生のイベントで優勝賞品が米俵って……。

「チーム一人一组で参加は自由…というわけで私がチームを考えてきたから発表するわよ」

そう言つて千世は何の資料かわからないがグラフや表の書かれた紙を取り出した。

「まずは一組目…大吾郎&柴田チーム」

「おつ…結構良いチームじゃね？」

「先輩、頑張りましょう」

「うむ…やるからには天下を獲るぞ」

「一人だけかなり燃えてるな…。」

「次に二組目…芹沢&鳴子チーム」

「よつしゃー！頑張るぜ」

「まあ私は別に優勝賞品なんかに興味はないけど負けるのは嫌だし…本気でいくわ」

文乃も委員長も運動神経は良い方だしチームワークも良い…この二人なら上位を狙えるだろう。

「そして三組目…巧&希チーム」

「巧…頑張ろう」

「ああ、そうだな」

希の何をやらせても一級品の仕事をする天才さは誰もが知っている。自分が方が足を引っぱるのではないか…そっちの方が心配だ。

「で…十和野なんだけど…」

先程までとは変わつて言いにくそうにしている。

「梅ノ森先輩…実は私クラスの友達とで約束をしたんですけど…」

こちらも言いにくそうに言つた。「あ、そう?ならちょうどよかつたわ。十和野だけペアがないからどうしようかと思つてたところなのよ」

「どうやらセツを言こにくそうだったのはそういうわけだったみたいだ。

「待つて…あなたは出ないの?」

「私は今回は裏側にまわるわ」

「何で言い出しつペのあんたが出ないのよ!?」

「仕方ないでしょ!ビーチバレーなんてやつたことがないから私とペアを組んだ人に迷惑をかけることぐら^レに見えるじゃない!」悔しそうに言い切る千世。

テニスやスキーなど幼い頃から英才教育を受けてきたスポーツなら千世はかなりの実力を持っている。

でもやつたことがないスポーツとなると話は別だ…そうなると逆に素人よりも下手かもしれない。

千世はそれを理解した上でこのチームを組んだんだろう。

「確かにあんたの言う通りだわ…今回は、その……『めん

珍しく自分から千世に謝る文乃。

「う、うるさい!同情なんかしなくていいわよ」

千世にとつての精一杯の強がり…でも気にしているのが千世の態度でわかる。

「とにかくあんた達は『迷い猫同好会』の肩書きを背負つて出場するんだからね。会長としての私のメンツにかけても絶対に優勝しますよ!」

なんだか重いのか重くないのかよくわからないものを背負わされて試合に挑むことになった。

「さあ、やつて参りました!『第1回梅ノ森学園ビーチバレー大会』実況は私、菊池家康」

「解説はこの梅ノ森千世がやるわよ」

特設ステージの上で一人が座つてしま^レりだす。

マイクはもちろん丶TR用の小型モーターも準備されておりかなり本格的だ。

「何やつてんの？」

素朴な疑問を投げかける。

「試合には出られないから私はこいつで田立つことにしたのよ。」

千世は胸を張つて答えた。

なるほど…正当な理由だな。

「で、家康、お前は？」

「俺が気絶している間にどんどん話が進んじまつてしチームを組もうにも誰も俺と組んでくれない…だからこの仕事を引き受けたんだよ！」

そういう口一トを作るのに邪魔だからって叩き起されたんだっけ。そうじやなけりや今もまだ埋まつてただろうな…。

家康の正当（？）な理由にも俺は納得した。

「というわけで早速一回戦を始めちゃいましょう！」

家康の司会進行でビーチバレー大会はスタートした。ビーチバレー大会に参加したのは全部で16チーム。

流石に優勝賞品が米俵一俵じゃあ参加数は稼げなかつたみたいだ。俺と希のチームはAグループ、他の『迷い猫同好会』メンバーのチームは全てBグループ…つまり決勝まで俺達は文乃達と戦うことはない。

そういうわけで俺達は早々に決勝まで駒を進めた。

相手にバレー部のエースがいようが、身長2メートル越えの長身男がいようが希がいれば関係ない。

正確で強烈なスパイクをバンバン決めるし俺がミスをしてもカバーしてくれる…はつきり言つて俺なんかいなくてもいいぐらいだった。「巧先輩、霧谷先輩、決勝進出なんてすごいですね！」

Bグループの試合が終わるまで休憩していると十和野がやってきた。

「まあ、ほとんど希のおかげだけど…といひで十和野はどうだった？」

「私は一回戦負けです。惜しかったんですけどね」
十和野は悔しそうな表情を俺と希に見せた。

「文乃と大吾郎達は？」

「今、準決勝で戦つてますよ。勝つた方が先輩達の決勝の相手です」「やつぱりあの二チームが勝ち上がったか…どっちが勝つんだろう」とするとBグループの試合が行われていたコートの方から歓声があがる。

どうやら決着が着いたようだ。

「希、行ってみようぜ」

「いやあ」

俺達は試合結果を知りにコートへ向かった。

コートの周りにいる生徒達をかき分けながら進んで行くと文乃と鳴子の姿が見えた。

「おーい！文乃、どうだつた？」

俺の声に気づいた文乃が首を横に振る。

どうやら負けたみたいだ。

となると決勝の相手は大吾郎と柴田か…。

俺はコートの反対側を見る。

そこで俺は目を疑つた。

「何あれ…」

俺の視線の先にいるのは確かに大吾郎と柴田…しかし一人が身につけているものは水着ではなく赤いフンドシ。

筋肉男とイケメンの赤フン姿のツーショット…かなりシユールな絵づらだ。

「流石の私もあれにはひいたよ…」

あの委員長でさえ一人を冷たい眼差しで見ていく。

すると赤フンツーピンチがこちらに向かってきた「どうしたんだよその

格好…」

「気合いを入れようと思つてな。見ろ！この情熱の赤を」
いや、『見る』と言わぬくても否が応でもその色は目に入ります

よ…。

大方柴田は無理やり大吾郎に付き合わされたのだろう…可哀想に。

「それよりも巧、賞品の米は必ず俺が貰つて行くぞ！」

ビシッという音が聞こえてきそつた勢いで俺に指を向ける。

「ど、どうしたんだよ急に？」

たかが米に何故コイツがこんなにも熱くなるのか理解できない。

「この米はプレゼントにするのだ！」

どうやら珠緒さんのためらしい。

大吾郎からのプレゼントなら米だらうとなんだらうとあの人は大喜びするだろう。

「こつちも賞品は譲らない」

グイツと希が前に出る。

あれ…希も？

「3日も店を閉めて今月ピンチ。だからこれで食費稼ぐ。こつちは生活がかかつてる、絶対負けない」

…ごめんな。

そんな心配までさせて…

試合開始前から俺はかなりブルーな気持ちになつた。

ピー

試合開始のホイッスルが鳴り、決勝戦が始まる。

まずは希がサーブを打つ。

希が打つたサーブを柴田が上手にレシーブして大吾郎がスペイクを打つ。

ボールは俺の真正面に。

が…ボールの勢いが強すぎて弾くので精一杯だつた。

ひょろひょろと上がるボールを見て『ミスつた』という考えが頭に浮かんだ時、希がそれを無理やり相手のコートにねじ込みポイントを奪つた。

「サンキュー希。助かったよ」

「にやあ。巧、次がくる…」

希の視線の先には「うおおー」とマンガみたいに叫んでいる大吾郎がいた。「流石だな、霧谷、巧…ようやく俺が本気を出してもよいと思える相手に巡り会えたぞ」

どうやらさつきのはまだ手を抜いてたらしい。

「冗談じゃない。

さつきのだつて十分きつかつたのにさらに強いスパイクがきたら…。何の対策もないまま次のプレーが始まる。

さつきと同じように希がサーブを打ち柴田がレシーブし、大吾郎にボールが回る。

「はっ！」と言いながら大吾郎は強烈なスパイクを放つた。そしてボールは誰も触らないまま地面に落ちた。

「どうだ俺のスパイクは！」

自慢げに言う大吾郎。

「確かに凄いスパイクだな…入つていればの話だけど」「何！？」

大吾郎がスパイクしたボールはコートのラインより大きく外れていった。

いくら凄いスパイクでもコートの中に入らなくては意味がない。

「くつ…次だ！次は決めるぞ！」

その後の結果はグダグダだった。

アツくなり過ぎた大吾郎は力任せのプレーで自滅…俺達の圧勝だった。

「てなわけで優勝したのは巧&希チーム…一人には梅ノ森家の独自ブランドの米俵一俵が贈られるわよ」

簡単な表彰式が行われる。

「ホントあんた達が優勝してくれて助かっただわ

賞状と賞品を受け取る際に千世が言った。

「会長のメンツとやらが保てたからか？」

「うーん…それもあるけどあの変態コンビの優勝を防いだのが一番かな。あんなの絵的にかなりマズいし」

まつ、確かにな…。

その変態コンビの一人、大吾郎は隅っこの方で落ち込んでいる。

よっぽど悔しかったのだろう。

何わともあれ無事にビーチバレー大会を終えることができ安心した巧であった。臨海学校3日目…と言つて1日目と同じで移動で潰れるからあとは帰るだけというわけだ。

時刻は朝5時。

大吾郎や家康はまだ寝ている。

が…ただ一人巧は起きていた。

毎朝仕込みのために早起きしているためもう体がリズムを覚えてしまつてゐようだ。

昨日はすぐ一度寝に入つたが今日は完全に目が覚めてしまつてゐる。（何か飲んでくるか…）

そう思い起き上がる。

そして他の二人を起こさぬようそおーと部屋を出て行つた。自販機のある広間まで行くと既に誰かがいた。

「あれ、希?」

そこにいたのは希だつた。

俺の声に希も気づく。

「巧、おはよう」

「もしかして希も田が覚めちまたのか?」「

「いやあ。巧も?」

「ああ。もう体に染みついてるみたい…」

笑いながら俺は自販機でコーラを買ってソファーに座る。

「毎日毎日希に迷惑かけてばかりでごめんな」

「家族は迷惑をかけ合うもの…巧がそう私に教えてくれた」

「そういやそうだな」

そんなこともあつたなあと思いながらコーラを一口飲んだ。

「なあ、前から聞いたかったんだけど…希は何で俺のこと好きになつたの?」

俺の質問に希は「どうしてそんなことを聞くの?」と言いつぶつと首を傾げる。

「希は可愛いし料理も勉強も何でもできる…正直俺なんかよりもっととかつこいい人と付き合えるはずだろ?なのに何で俺を選んでくれたのかなつて思つてさ」

「私は巧の優しい所が好き。私のこと『家族』って言ってくれて暖かく迎え入れてくれたり、誰にでも優しい…そんな巧だから私は好きになつた」

希は即答だった。

確かに巧の言う通りかつこいい人ならいくらでもいるだろう。でもそんな人よりも巧の方が良い…それが希の素直な気持ちだった。「自己ではそこまで自覚はないんだけどな…でも希にそんな風に想われているのは嬉しいよ」

希と自分がつりあつているか自信がなかつた巧には希の言葉はありがたかつた。

「また明日から普段通りの毎日だな」

「にゃあ。ケーキいっぱい作る

「そうだな…俺もできる限りサポートするから、よろしく頼むよ

「…にゃあ」

『任せろ』と言わんばかりに希は強く頷いた。

その後も俺と希は何気ない雑談に華を咲かせた。

臨海学校（後書き）

どうでしたか？言いたいコトは、感想として取付中です。

夏休み（前書き）

いつも、お久しぶりです。斎藤章です。よろしく読んで下さい。

夏休み

臨海学校も無事に終え7月も終わりに近づく頃、学校は既に夏休みに入っていた。

学校が休みだから店を誰もいないのに開けておくなんてことをしなくて済むから助かる。

「今年の夏休みは落ち着いてるな」

「そりゃそうでしょ。去年はどつかの誰かさんがあんな無茶なことしたから余計に忙しかつただけだし……」「

文乃は千世を横目で見ながら言つ。

「しようがないでしょ！だいたいあんた達が私を無視するからいけないんじゃない。でもまあ…今では反省してるわよ…」

確かに去年の夏はまだ今みたいにお客さんが毎日来るなんて状況じやなかつた。

そこに千世が近くにライバル店なんかオープンするから全く客が来なくなつてマジで店が潰れかけたなんてこともあった。

噂では客が来なかつたのは他に理由があつたらしいが、あの時は本当に大変だつた。

でもこんなことがあつたから千世と俺達は仲間になれたと思つている。

店の扉が開く。

どうやら客が来たようだ。

「やあ、巧くん。乙女さんはいるかな？」

そう言つて来店してきたのは商店街青年団長の現団長さんだった。

「こつものアレで今もまだ帰つてきてないんですよ」

乙女さんのことは鈴音町では知らない者はいない。だから『アレ』と言えばすぐに皆理解してくれる。

「やうか。それは困ったなあ…実はコレのことなんだけどね」

そう言つて一枚のチラシを手渡す。

そこには『夏祭り』と大きく書いてあった。

「またこの時期になつたんだけどまだ何をするか決まってなくてね…何か良い案はないかなつて思つてね」鈴音町商店街の夏祭りは年々人が集まらなくなつてきている。

毎年もつと人を呼び込もうといろいろと企画するのだが、これといって成果は出でていない。

去年は『水着コンテスト』を行い文乃、希、千世も参加した。

「…特にないです」

そんなこと急に言われても無理な話である。

「そうか…まあ考えていてくれないか。また一週間後にくるから」

そう言つて団長は安いクッキーを一つ買って帰つていった。

「何か良い案もあるか?」

団長さんが帰り客もいない店内で巧は文乃、千世、希、十和野に聞いてみた。

「そうね…中国の雑技団でも呼んだらどう?」の私が大御所の雑技団を手配してもいいし…

「却下!」

千世の案をものの数秒で却下する文乃。

「あんでよ!?」

「こういふのはただお金をかければ良いって問題じゃないのよ

「じゃあアンタは何か良い案でもあるわけ?」

「そ、それはないけど…」

「まあまあ。団長さんも言つたけどあと一週間もあるんだから気長に考えればいいさ」

とりあえずケンカを始める寸前の二人をなだめる巧。

「希は何か案ある?」

「…水着コンテスト」

「却下!」

希の案には一人して反対する。

どうやら一人とも去年の『こう』りのようだった。

その数日後

夏休みだが今日は登校日、それを終え帰路につく巧たちは皆何か考えながら歩いていた。

考へてることは皆同じ。

『夏祭り』に何をするかだつた。

一週間もあるから、そう言つてゐるうちに刻々と期限が迫つてきた。しかし良い案なんて一つも出てない。

大吾郎や家康にも聞いてみたがボディービル大会やオタク検定などボツ案ばかり、結局自分たちで考へるしかないというわけで焦つていた。「あ～もう一面倒くさいわね。何で私たちがこんなことしなくちゃいけないのよ」

千世の頭はオーバーヒート寸前だ。

「仕方ないでしょ。いつもお世話になつてゐる団長さんの頼みなんだから。そんなこと言つてる暇あつたら案を考えなさいよ！いつも変なことばかり思いつくくせにこいついうのはダメなのね」

「な～に～お～…芹沢！今のは聞きづてならないわね」「

しょうもない」とケンカを始める一人。

二人ともかなりストレスを溜め込んでるようだ。

「ケンカしたつて何も変わらないぞ」

俺の一言でとりあえずその場は収まつたが一人ともムスッとしている。

こんな時に乙女姉さんがいれば。

そんなことを思つてると『ストレイキヤツツ』に着いてしまつた。

「ただいま～

誰もいなのはわかつてゐる。

でも一応言つてみると、すると、

「おかえりー。みんな

厨房から元気良く出てくる乙女の姿を見て皆驚く。

「乙女姉さん！帰つてきたんだね！？」

「植樹中に大地震が起きてね。そつちの方の援助もしてたら帰つて

くるの遅くなつちゃつた…「ごめんねみんな」

真剣さゼロの謝罪だがそんなこと巧たちには関係ない。

乙女が戻ってきた…それだけで十分すぎるのことだ。

「でも何で急に?まだあつちは完全に復旧してないんじゃあ…」

「うん。 そりなんだけど、ほら、いつもそろそろ夏祭りの時期でしょ。だから手伝いが必要かなあって思つて」

「うこう行事には必ず参加するのも乙女姉さんの特性だ。

「そのことで乙女姉さんに話があるんだけど…」

巧は団長さんに頼まれたことを話した。

「ふむふむ…わかつた。この私に任せなさい…」

話して数秒。

乙女は自分の胸をドンッと叩く。

「えっ、もう思いついたの! ? 何何?」

「それは後程のお楽しみついことで、じゃあ私は団長さんと話をつけてくるね~」

そう言つて乙女は店を出て行つた。その一日後、鈴音町全域にあるチラシが配られた。

そのチラシには『第1回鈴音町お菓子作り王座決定戦』と書いてある。

当然ストレインキヤッシにもこのチラシは届いていた。

「これが乙女の案…」

「えへへ…良い案でしょ?これなら私達も参加してお店の宣伝もできるし」

そう言つてペースサインをする。

確かに良い案だ。

ちやつかり店の宣伝のことまで考えた乙女の案にみんなも『流石だ』

と言つような表情だ。

一年連続で町の祭りを自分たちの店の宣伝に使うのは多少心が痛むが…。

「お菓子ならなんでも良いから希ぢやん頑張って」

「えつ、乙女姉さんは出ないの？」

「私は審査員長だから」

よく見るとチラシ『審査員長：都築乙女』と書いてある。

「大丈夫。希ちゃんがいるんだから」

まあ希なら心配ないか。

正直乙女姉さんが出場してもあんまり期待はできなかつただひつじ。

「……にやあ。頑張る」

希は力強く頷いた。

祭り一日前

その日のストレイキャッツの営業は終了し、文乃たちは帰つていつしまつたため店内はしつらんとしている。

「ニヤー」

数匹の猫達が何かを欲して俺の足下に集まつてきた。

「ん、餌か？」

時計を見ると普段猫達に餌をあげている時間だつた。
「ちょっと待つてろよ」

俺は猫達をなだめ、エサを準備しに行く。

廊下には大量のキャットフードが積み上げられている。

以前夏帆さんからもらつたものだ。

うちには15匹以上の猫がいる上にもらつてから3ヶ月は経つたのだが未だに半分も減つてない、いつたいどのくらいの量をくれたのだろうか。

「巧、ちょっと来て」

餌の準備をしてると希がひょいつと顔を出してきた。

「どうした？」

希に連れられて厨房に行く。

するとそこには一つのケーキがあつた。「一日後のお菓子作り王座のための試作品」

そのケーキはシンプルなショートケーキだった。

「食べてみて」

そう言つてケーキを切り、俺に差し出す。

そのケーキを俺は一口食べた。

「おいしいよ。でも何でショートケーキに？」

「ケーキと言つたら一番に思いつくのはショートケーキだと思ったから」

俺も希の考えに賛成だ。

やつぱりケーキと言つたら王道はショートケーキだ。

「味は申し分ないよ。あとは飾り付けを工夫すれば良いと思つよ」「にゃあ。とつておきのを考える」

「ニヤーーー！」

突然猫の鳴き声が聞こえたかと思うと後ろから猫が背中に飛びかかってきた。

餌を待ちきれなかつたのだろう。

しかしあまりに突然のことだつた俺はバランスを崩し、希を巻き込んで倒れ込んでしまつた。

「痛つ…希！大丈夫か？」

不可抗力とはいえ希を押し倒してしまつた俺は慌ててどける。

「にゃあ。大丈夫」

何事もなかつたように希も立ち上がる。

「そう？…」「めんな

「心配しないで。逆に少し嬉しかつた…」

希はそう言って顔を赤くする。

ちなみに俺もそれを聞いて顔を赤くする。

「何かスゴい音がしたけど大丈夫？」

騒ぎを聞きつけて乙女が厨房にやつてくる。

「大丈夫。コイツのせいで倒れただけ……」

俺は飛びついてきた猫を掴み乙女姉さんに見せる。

乙女姉さんは一瞬安堵の表情を見せたが希を見て表情が一変した。

「希ちゃん、ちょっと手を見せて」

そう言つて希の右手を触る。

「う…」「

すると希の表情が歪む。

「これ…骨折してゐるわ…」

「えつ…」「

乙女姉さんの一言にただ驚く」としかできない俺だった。「これで大丈夫」

乙女姉さんによつて希の手に包帯が巻かれた。

「いやあ、ありがと」

乙女に頭を下げる希。

「こんなこと朝飯前だから大丈夫よ。でも…その手じゃケーキ作りは無理そうね」

希の右手は包帯でぐるぐる巻きにされている。

使えるのは左手だけ…片手だけでケーキなんか作れるわけがない。

「私…やる

「気持ちはわかるけど今回ばかりはよつもないわね」

乙女の言葉にも希は諦めない。

「いやー…やる

さすがの乙女もこれには困ってしまった。

「じゃあさ…」

今までずっと黙っていた俺は口を開いた。「俺が希の右手になるよ

二人とも俺の言つてることの意味がわからずさよとんとしている。

「希が片手ではできない作業は代わりに俺がする…これで希はケーキが作れるだろ?」

「それいいね やつすが巧」

そう言つて俺を抱きしめようとすゐ乙女姉さん、だがそれを俺はかわした。

「でも巧に迷惑かかる…」

「元はと言えば俺に責任があるわけだし。それに前から言つてるだろ。家族には…」

「迷惑かけても良い」

俺が言いたかつた言葉を「一ノ一ノしながひ皿」乙女姉さん。そしてそれに希も微笑む。

「やつだつた。じゃあ迷惑かける… よろしく、巧」

「おひー任せる」

俺は希に親指を立てて言った。

なんやかんやで夏祭り当日。

俺と希は控え室で出番を待っていた。

他の参加者がいる中、俺は一人落ち着かない様子で座っていた。

「巧、大丈夫？」

「う、うん… 大丈夫だよ。ちょ、ちよつと緊張しちゃつてさ」

笑顔を見せようとすると表情が引きつっているのが自分でもわかる。

「希は平気なのか？」

「にゃあ。平気。巧がいるから」

「？… どうしてそう思えるんだ？ 僕は希や乙女姉さんよりケーキを作るのは上手くないし自分で美味しいと思えたケーキを作れた試しはほとんどない… なのに何故？」

「私にもわからない。でも巧となりきつと美味しいケーキが作れる

… そう思つたから」

根拠は全くのゼロ。

でも希の言葉に何故か俺も納得できた。

俺も希となら上手くケーキが作れる気がする。

そう思うと俺も何故か自然と落ち着いてきた。

「巧、希… 応援に来てあげたわよ」

するとそこへ『迷い猫同好会』のメンバーがやつてきた。

「みんな… どうしてここに？」

「どうして… つて… わつき応援に来たつて言つたでしょが…」

「どうせ巧つちのことだからガチガチに緊張してるんじゃないかと思つてや」

「アハハ… ありがと…」

ほんの数分前までそんな状態だったわけだから苦笑いしかできない。

「それにしても満足にケーキも作れないのにパーティシェールの希を怪我させるなんて…本当に巧はバカよね」

「文乃…もしかして心配してくれてる?」

「か、勘違いしないで。私はただ怪我をした希だけを心配してるだけなんだから!」

全力で否定するがこれが文乃にとっては全力の肯定だとみんな理解する。

「参加者の皆さん。そろそろ準備して下さい」

そこへ係員がやってきた。「じゃあ行ってくるよ」

「頑張れ巧つち!奇跡が起きることをこのハーフに祈つとくよ」

(……ちょい待て委員長。『奇跡』ってどういう意味だ?)

「お前の運の強さを期待してるぞ」

「巧、己の力を信じる。そうすれば実力以上のことができるはずだ」

(あれ……家康、大吾郎、お前らも……)

「巧! 希の足を引っ張ることだけはしちゃダメよ」

「希、私達会場にいるから合図してくれればすぐに駆けつけるから何かあつたらいつでも合図しなさい」

(千世、文乃までそんなこと言つの…)

(え~と…みんなは俺達を応援しに来てくれたんだよな…けどみんなが来る前より不安になつてゐる気がするんだけど氣のせい…だよね……?)

そんなことを考えながら俺と希は控え室をあとにした。

「それでは『第一回鈴音町お菓子作り王座決定戦』を始めたいと思います。まずは参加者の紹介をさせて頂きます」

そう言つと会場が暗くなり、入り口だけにスポットライトが当たる。そしてBGMが流れ始めた。

「HントリーNo.1。オーナー、店員は美人ばかり。誰もいないのに営業していたり、十数匹の猫が暮らしていたりと、鈴音町七不思議の一つになつてゐる洋菓子店『ストレイキヤツ』から都築巧さんと霧谷希さん!」

拍手が鳴り響く中入場する俺と希。

(ていうか、そんな七不思議初めて聞いたぞ。誰だ！人の店を心靈
スポットみたいに言つた奴は！？)

「エントリー№・2。専業主婦歴40年。掃除、洗濯、料理など
家事はなんでもこなす鈴音町婦人会代表の小林ひろみさん」
小林さんが入場すると間髪を入れずに司会者はどんどん進行していく。

「エントリー№・3。最近テレビや雑誌で引っ張りだこ。鈴音町
で料理教室も開いている今回の優勝候補：伊藤恭子さん」
会場には今日一番の拍手が鳴り響く。
どうやら相当人気があるようだ。

「ルールは簡単。制限時間内により美味しいお菓子を作った人の勝
ちです。それでは早速始めたいと思います。調理スタート！」
司会者の号令とともに開始の号砲が鳴った。まずはスポンジ作りか
らだ。

片手しか使えない希にはこの作業はできない…だからこれは俺の役
目だ。

俺は小麦粉を加え混ぜる作業をする。

「そろそろいいかな」

「ダメ。まだ混ぜ方が足りない」

次の作業に移ろうとした俺を横で見ていた希が止めた。

「もう十分じゃないのか？」

「それだとふくらみが悪くてぼそぼそしたスポンジになる」

希にそこまで言われると逆らえない。

俺は今日は希の右手なんだしな。

言われた通りに混ぜる作業をする。

「にゃあ。もういい…次の作業」

その後も希の指示や指摘を受けながらケーキを作つていった。

「さて…それでは審査に入りたいと思います」

それぞれお菓子を作り終え、後は試食してもらい結果を待つだけだ。

「それではまずは伊藤さんのお菓子から審査していただきましょう」「伊藤さんもケーキを作っていた。

ガトーショコラだ。

「お菓子なんで当然甘いんですけど甘過ぎずちょうどぴり大人の感じのガトーショコラにしてました。かなり上手にできたと思います」さすがはプロだ。

コメントは自信に溢れてるし外見もしつかりとまとめられてる。審査員の三人は三つに切られ配られたケーキを口にした。

「これ美味しいー！」

乙女姉さんは笑顔でコメントをする。

「しつとりとしていてとっても美味しいですよ」

二人から高評価を受け伊藤さんの表情に余裕が見える。しかし、

「このいうケーキは苦手なんですね」

と、ここで一人の審査員から苦言が出た。

良かつた。

プロだから手こわいだらうけどまだ勝ち田もあるみたいだ。

「それでは次は小林さんのお菓子です」

小林さんのお菓子はみたらし団子だった。

「このお菓子は皆さんも一度は食べたことがあると思います。派手さはありませんが和菓子の良さを楽しめると思います」

簡単のコメントのあと、審査員の試食に入る。

「これも美味しいーうちの店で出しちゃおうかな」

（乙女姉さん…「うちは洋菓子専門店だから和菓子は無理じゃないかな。それにコメントがさつきとほとんど変わらないし…）

「私はこうじつたお菓子が好きなんですよ」

先程苦言を言つた審査員は、満面の笑みだ。

もう一人の審査員も軽く誉めた程度のコメントをした。

そしていよいよ俺たちのケーキが審査される番になった。「最後は巧さんと希さんのお菓子です」

審査員の下に置かれたケーキ。

「自分たちはケーキの中でも王道のショートケーキにしました」
デコレーションは全て希が考え、ほとんどの作業は希がやった。
外見は完璧…あとは味だ。

「このショートケーキは良いですね。スポンジもしつとりとしてますし…、とても高校生が作ったようには思えません」

「このケーキなら私も好きになりそうです」

「すごい！巧…よく頑張ったね」

全ての審査員からのコメントを聞き、気持ちが高ぶる。
もしかすると優勝できるかも。

そんな期待を寄せて審査は終了した。

約10分後

審査員三人による協議が行われ、いよいよ結果発表となつた。

「さて…それではついに鈴音町お菓子作り対決の決着がつきます。

優勝は伊藤さんのガトーショコラか小林さんのみたらし団子か巧さんと希さんのショートケーキか…審査員長、都築乙女さん、結果をどうぞ」「

すると乙女姉さんが一步前にでる。

俺は緊張から唾を飲み込んだ。

「優勝は…小林さんのみたらし団子です！」

その発表の瞬間、小林さんは大喜びする。

そして負けた俺はショックからか全身の力が抜けた感じがした。

その後のコメントや司会者の話はまったく頭に入つてこなかつた。
誰もいないストレイキヤツツの厨房、そこに俺は一人でいた。

希のデコレーションは完璧だった。

（他のどのお菓子よりもインパクトはあつたはずだ。それなのに何故負けたのか、やっぱり俺が作ったからダメだったんだ。でも希が全部作つていたら優勝できただんじゃないかな？）

そう思うと希に顔向けてできなかつた。

文乃たちも心配して慰めの言葉をかけてくれたがみんなが応援して

くれていた分余計に申し訳ない気持ちになつた。

今もその気持ちを振り切ることができず、厨房で一人落ち込んでいる。

「巧…」

声に気づき入り口を見るとそこには希が立っていた。「希…」

今の俺には希にかけられる言葉がなかつた。

「巧、このケーキ食べてみて」

「これって…」

希が差し出したケーキ…それはお菓子作り対決で俺と希が作ったケーキだつた。

「にやあ…早く」

「あ、ああ…」

俺は希に急かされながら一口食べた。

「美味しい？」

俺は小さく頷いた。

作ったケーキは普段の希のケーキとほとんど変わらない出来だつた。自分の普段のケーキの味からしたら雲泥の差だつた。

「たぶん私一人で作つても優勝はできなかつた」

希の言葉に俺はハッとした。

希は気づいていた。

俺が負けた責任を感じて落ち込んでいることを。

「私は最高のケーキができたと思う。だから巧が落ち込む必要はない」

希の言葉は少しづつ俺の気持ちを楽にしてくれた。

「私は嬉しかつた。巧が私の我が儘を叶えてくれたから。……巧、

ありがとう」

希は微笑みながら言った。

それを見ると今まで落ち込んでいた自分がバカバカしく思えてきた。

「こっちこそありがとな、希」

俺も希に礼を言った。

そしてまたこんな機会があれば次は希と一緒に優勝して喜びを分かち合おう…そう心に決めた。

それから1ヶ月後

希の怪我は完治しメインパーティシェールとして復帰している。因みに乙女姉さんは希が復帰した次の日にまたどこかへ行つてしまつた。

「希、このケーキ食べてみてよ」

そう言つて差し出したのは俺が作ったケーキだ。

あの出来事以来自分のケーキの腕を上げるためにこつして毎日ケーキを作つては希に試食してもらつている。

「いやあ…スポンジがかたい」

希からの不合格のコメント。

正直俺はまだ希から合格をもつたことが一度もない。

「またか…俺にはやっぱり才能ないのかな…」

ここまでダメだと自分の才能を疑いたくなる。

「大丈夫…巧ならできる」

そんな俺を希は頭を撫でながら励ましてくれる。

「ありがと…希」

「巧！もう開店時間なのになんて準備中の札が出てるのよ…？」

「もうそんな時間か！？ヤバい…希！」

「いやあ…急ぐ」

文乃が来たことにより慌ただしい一日が始まる。

この夏休み、俺はケーキを上手く作れるようになるといつ目標ができたのだった。

夏休み（後書き）

どうでしたか？また、次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358m/>

無口猫の恋

2011年4月1日22時45分発行